

東大寺二月堂修二会（お水取り・お松明）について

東大寺二月堂の修二会（しゅにえ）は、天平勝宝4年(752 大仏開眼供養会の年)、東大寺の初代別當となられた良弁僧正（ろうべんそうじょう）の高弟であった、実忠和尚（じっちゅうかしょう）によってはじめられたと伝えられます。以来一度も途絶えることなく続けられ、平成25年(2013)で1262回目を数えます。

この「修二会」は、「十一面悔過（じゅういちめんげか）」という行（ぎょう）を中心とする法会で、十一面観世音菩薩（じゅういちめんかんぜおんぼさつ）を本尊とし、「天下泰平（てんかたいへい）」「五穀豊穡（ごこくほうじょう）」「万民快樂（ばんみんけらく）」などを願って、人々に代わって懺悔（さんげ）の行を勤めるものです。

現在では、2月20日からの前行に引き続いて、3月1日から2週間にわたって本行が行われていますが、もとは旧暦の2月1日から本行が行われていました。このため、二月に修する法会という意味をこめて「修二会」と呼ばれるようになり、また二月堂の名もこのことに由来すると言われています。

修二会期間中の3月12日深夜（13日の午前1時半頃）には、二月堂下手の、閼伽井屋（あかいや）という建物の中にある「若狭井（わかさい）」という井戸から、観音さまにお供えする「お香水（おこうずい）」を汲み上げる儀式が行われます。井戸は建物の中にあり、見る事が出来ませんが、お香水を運ぶために二月堂と若狭井の間を行き来する行列は見学することができます。これを「お水取り」と呼んでいます。

修二会の行は、六時とあって、一日を六つの時に分けて勤められます。六時とは「日中」「日没」「初夜」「半夜」「後夜」「晨朝」のことをいいます。

練行衆（れんぎょうしゅう）は、昼間に堂内で「日中」「日没」の行を勤め、一旦、寝泊りしている二月堂下の参籠宿所という建物へ下って休憩し、日が暮れてから、残りの「初夜」「半夜」「後夜」「晨朝」の行を勤めるために再び二月堂の本堂へ上がってゆきます。

この時に、練行衆の道明かりとして大きな松明（たいまつ）に火がともされますが、この大松明が世間に広く知られるようになり、「修二会」全体のことを含めて、「お松明」と呼ばれることもあります。